

はくぶつかん
この博物館にある
3つの展示ゾーンを
みてみよう!

「恐竜の世界」ゾーン

「恐竜の世界」ゾーンの中には「日本とアジアの恐竜」コーナーがあり、福井県の発掘調査で発見された新種の恐竜6種と動植物化石が展示されています。また、中国とタイで見つかった恐竜化石などを紹介しています。

このほかに、「恐竜の世界」ゾーンには中国四川省の中生代の情景を実物大に再現したジオラマ「ダイノシアター」があり、恐竜がいた時代を体感することができます。



世界的にも貴重な化石や骨格標本が
ならぶ「恐竜の世界」ゾーン。

「生命の歴史」ゾーン

ここでは、生命が誕生して以来、はげしい地球環境変化のなかで進化と絶滅をくりかえしながら人類が誕生し、現代へとつながる46億年の地球の歴史を時系列で見ることができます。



本館2階に位置する「生命の歴史」ゾーン。

「地球の科学」ゾーン

このゾーンでは、地球科学の歴史、陸と海の堆積物、堆積物にうまっていた化石、地球の活動のようす、活動でできた岩石・鉱物などが、体系的に展示されています。



展示されている隕石の多くは、太陽系ができたおよそ46億年前にできたもの。



恐竜時代の海ガメである「アーケロン」の標本。

2023年に新設された大型モササウルス類のティロサウルスの標本。



「ダイノシアター」は、恐竜時代の風景の再現映像（CG）をうつしだし、見る人を恐竜時代にいざなう。



恐竜をはじめ、さまざまな動植物の化石が発見されている中国・四川省の情景を再現したジオラマ。

地球の歴史カレンダー

地球が誕生してから現在にいたるまでの約46億年を1年間に置きかえると、恐竜が出現したのは、だいたい12月13日くらいで、絶滅したのはおよそ26日となる（12月14日ごろが恐竜時代）。また、人類の誕生は12月31日午後11時すぎにあたる。人類の歴史は地球の歴史とくらべると非常に短いことがわかる。

地球の誕生

1月

46億年前

2月

42億年前

3月

39億年前

4月

35億年前

5月

31億年前

6月

27億年前

7月

24億5000万年前

8月

20億5000万年前

9月

16億5000万年前

10月

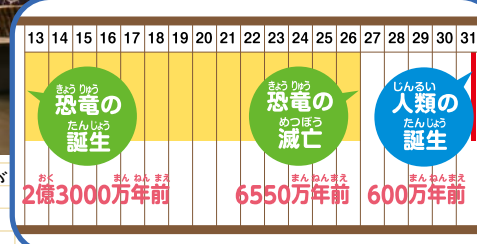
12億5000万年前

11月

8億5000万年前

12月

4億年前



① 全身骨格やロボットの展示

福井県立恐竜博物館の展示で目玉なのが、ティラノサウルスのロボット。常設展示室のほぼ中央に2本あしで立つ姿は圧巻です。7mをこえる巨体を動かすように、来館者の誰もが息をのむのを覚悟してください。このほかにも、全身骨格をはじめとして、さまざまな時代の恐竜の全身骨格が展示されています。

迫力満点の全身骨格

右の写真は、カマラサウルスの全身骨格です。この全身骨格をはじめ、恐竜博物館の展示には、数多くの「実物」の化石標本が使われています。こうした実物標本は、学術的にとても貴重！レプリカ（→まめ知識）からは得ることができない膨大な情報が残されているからです。

実物化石からわかること

- 骨の断面を顕微鏡で観察することで、成長速度や年齢、病気の有無などについて調べることができる。
- CTスキャン（→p17）により、化石内部の血管のあとや脳の形などを明らかにできる。



全長15m、高さ5mにもなるカマラサウルスの全身骨格。全身の約9割の骨が実物化石で組み立てられている。



ティラノサウルスのロボット。2023年には、最新の研究成果をもとに恐竜の口の部分をリニューアルした。リニューアル前は、歯がむき出しになっていたが、新しいものにはくちびるがつき、歯がかくれている。



巻頭特集で紹介した「恐竜の世界」ゾーン（→p2）。ティラノサウルスやアロサウルス、カマラサウルスなど、さまざまな時代の恐竜の全身骨格が展示されている。

標本の展示と保管

発掘された化石が、なんという恐竜のどの部分の骨なのか？ ひとつひとつ入念に調べ、大きな骨から細かい骨などを組み立てて展示するのはとてもたいへんな作業です。恐竜の化石は、世界にひとつしかない貴重な

もの。小さな骨でもなくしてしまったり、こわしてしまったりしないように、大切に保管します。これは、貴重な発見を後世の研究へと引き継いでいくためでもあります。どの骨にもそれぞれ名前がついています。展示を担当する研究員は、化石や骨の名前をみんな覚えていくといひます。



レプリカ

オリジナルの化石標本はひとつしかない。そこで本物の化石標本と色や形がそっくりのレプリカ（複製）をつくり、それをもとに研究を進める。また、全身の骨の化石のすべてが発見されることはほとんどないので、全身骨格を組み立てる

際には、不足の骨はほかの化石や標本、資料を参考にレプリカをつくっておぎなう。精巧なレプリカをつくることで、世界じゅうの研究者が同じ標本を同時に調べることができる（レプリカ製作を担当する高田さんの職員ファイルはp21）。

●レプリカができるまで



化石にシリコンをぬり、型を取る。



型に樹脂を入れて、成形する。



型から取りだしてレプリカ完成！

展示を更新する

恐竜博物館では2000年に開館して以来、新たに発見された化石や復元骨格など最新の研究成果を展示に反映させてきました。また、福井県で発見された新種の化石を新たに展示したり、展示の解説文を最新情報に更新したりしています。来館者がいつまで経っても驚きがあり、学びが得られる。そんな展示づくりに日々取り組んでいるのです。



特別展「獣脚類2025」の開幕に向けて、日本初公開となる大型肉食恐竜・スピノサウルスの全身骨格を設営するようす。

展示解説員のしごと

恐竜博物館の研究員にとって、来館者に向けて展示の解説も重要なしごとのひとつです。一方で、「展示解説」に特化した展示解説員も活躍しています。展示解説員は、展示室内をめぐって積極的に来館者に声がけをしています。展示解説員の八ツ田さん（→右ページ）は、「研究員が明らかにした専門的でむずかしい内容を、だれもがわかる言葉でかみくだいて伝える、研究と来館者をつなぐ架け橋のような存在をめざしている」といいます。



スピノサウルスの全身骨格の前で解説をおこなう研究員の八ツ田さん（→右ページ）。



八ツ田さん（→右ページ）が考案した「ダイノツアー」を楽しむ来館者のようす。



常設展示と特別展示

恐竜博物館の展示には、常設展示と特別展示の2種類がある。「常設展示」は、博物館からのメッセージを伝えようとしている展示のこと。研究員がこれまでの研究成果をもとに、展示の内容を考え、時代の流れやストーリーにそって標本を配置している。新たな標本が見つかったら、展示の入れかえがおこなわれることもある。

一方、「特別展示」は特定のテーマをもうけて、期間限定で開催する展示のこと。取りあつかうテーマは、季節や周年に合わせたものから、最新の研究成果をいち早く公開するものまでさまざま。開催期間中にしか見ることができない、国内外から借用した貴重な標本や資料で構成されているのが特徴だ。



職員ファイル① 中田健太郎さん

研究・展示課

しごと歴：14年（現在の職場では8年）
大学で専攻した分野：古生物学（ジュラ紀アンモナイト類の研究）
子どものときの趣味：つり、生きもの採集、サイクリング、化石採集

中田さんは、これまで日本で発見されたジュラ紀のアンモナイト化石を対象として、おもに分類学や生層序学という学問をしてきた研究員。2025年は特別展、解説員研修、徳島県との共同発掘調査などを担当。展示のしごとのほかにも会期中の特別展ツアーの講師などもおこなっています。

●このしごとにつこうと思ったきっかけは？

子どものころから恐竜が好きで、将来は恐竜の発掘を試みたいと思っていました。大学生のときにアンモナイトのおもしろさのとりこになり、その後、好きな化石や古生物にかかわりながらその魅力をもっと世間に広く知ってもらえるようなしごとをしてみたいと思うようになりました。



職員ファイル② 八ツ田晴輝さん

展示解説員

しごと歴：5年
大学で専攻した分野：動物行動学
子どものときの趣味：図鑑を読むこと、絵を描くこと、外遊び

八ツ田さんは施設の案内から質問受付窓口「展示インフォメーション」での対応、展示解説のリクエスト対応、恐竜をはじめとする古生物の魅力解説などをおこなっています。

●このしごとにつこうと思ったきっかけは？

大学生のころに博物館学芸員資格取得のための講義を受けるなかで、人びとの知的好奇心や学習意欲を刺激して、生涯にわたっての学習を支援する博物館教育という分野に出会い、強い興味をもちました。また、学芸員実習で、研究や標本整理よりも教育プログラムを考案するのが楽しいと感じたことがきっかけです。

●実際に働いてみてどうですか？

「恐竜博物館深掘りガイド」の考案や、ガイドのなかでも

●やりがいを感じるのは、どんなときですか？

試行錯誤してつくった展示や図録などが完成したときに達成感を感じます。それを来館者が楽しんでくれたり、化石や古生物に関心をもってくれたりするのを目の当たりにすると、やりがいを感じます。かつての自分のような幼い恐竜博士たちが目をキラキラさせて博物館を楽しんでいる姿を見るとくにうれしく思います。

●日頃、どのようにしごとをしていますか？

展示の設計や造作、解説パネルや図録の文章を執筆、古生物イラストレーターと協力して復元画を制作、特別展グッズ監修など、しごとの内容はさまざま。海外の博物館や大学などから恐竜化石や標本などを借用して展示するための交渉や、輸入手続きをすることもあります。

来館者に展示解説をおこなうこともあります。来館者それぞれに合わせて、提供する情報量や言葉・知識の程度、話すスピードなどを細かくかえるように心がけています。

●子どものころの夢は？

古生物学者になって恐竜の発掘をしたいと思っていました。大学3年生のときは、恐竜ではなくアンモナイトを研究する道へと進みましたが、時を経て、恐竜の発掘にたずさわるしごとにつき、毎日恐竜に囲まれた日々を過ごしていることに不思議な縁を感じています。

「ダイノクイズ」は、研究員の手を借りつつ1からつくったものなので、思い入れが強いです。業務では、自分にはない視点の質問も多いため、ひとりひとりに合わせた解説をすることが、想像以上にむずかしく日々なやみながらしごとをしています。わかりやすく伝えるために発声や話し方のトレーニングもおこなっています。

●しごとをする上で、大切にしていることは？

研究員と来場者をつなぐ存在として、みなさんの「なぜ」を大切に疑問にしっかりと向き合うこと、自身の驚きや感動を伝えて、科学を楽しむきっかけを提供すること、科学に真摯に向き合って、わからないことは「わからない」と伝えること、この3つを大切にしています。

●子どものころの夢は？

幼いときから恐竜が好きで名前を覚えることや図鑑で新しい知識にふれることに熱中していました。博物館などで見る恐竜たちに魅了されていたわたしにとって、テレビ番組で恐竜について語る研究者は大スターでした。大学で学芸員資格を取得して解説員になりましたが、恐竜に囲まれながら研究者を夢見る子どもなどさまざまな人たちに恐竜や古生物の魅力を伝えられるのは、恐竜博士をめざした過去があったからだと考えています。



③ 発掘作業・クリーニング

ここでは、福井県立恐竜博物館の研 究員がおこなう化石発掘調査の工程をくわしく見てみましょう。現地の作業員が巨大な重機で岩石を切りだすようすから、手作業で細かな化石を調べる「ハンマー隊」の活動、最後に化石をきれいにする「クリーニング」までのようすを、写真で紹介します。

化石発掘現場の一日

恐竜博物館では、1999年から福井県勝山市北谷町で発掘調査を行っています。発掘は、毎年7月下旬から9月上旬におこなわれ、恐竜博物館の研究員全員がかかわっています。

発掘調査の一日の流れは、つぎのとおりです。

1 前線

前線とよばれるチームでは、重機を用いて、がけから岩石を切りだす。研究員は、重機のまわりにひかえていて、ひと割りするたびに岩石の表面に化石が見えていないかチェックする。

切りくずされた岩石の表面に、重要な化石を見つけた場合は、大きい岩石ブロックごと持ちかえることもある。



朝礼のようす。

2 朝礼

作業を開始する前に、その日の発掘メンバー全員で朝礼を実施（大学生などの調査補助員も参加→まめ知識）。一日の作業内容や注意事項を共有する。

3 発掘開始

落石などの危険から身を守るため、全員必ずヘルメットを被り、作業開始。基本的に、研究員は「前線」と「ハンマー隊」にわかれ、それぞれの担当場所で作業をおこなう。

4 ハンマー隊

前線で切りくずされた岩石は、がけから少しはなれた広場に運ばれ、研究員たちがハンマーで小さく割って、化石を探す。研究員は、大学生などの調査補助員が見つけた化石かどうかかわかりづらいものの鑑定もおこなう。発見した化石は、記録して、その後、脱脂綿でくるむなどの処理をしてから丁寧に梱包する。



小さな岩石のなかに化石が入っていないか、慎重に観察する研究員の蘇さん（→p26）。



発掘現場で化石の記録をおこなう築地さん（→p26）。



ひょうほんばこ 標本箱（テンバコ）に収められた、発掘化石の数かず。



発掘直後の化石を保管するスペース。

4 午後作業開始

5 博物館に運びこみ

午後もし引き続き、前線とハンマー隊の二手にわかれて作業をおこなう。日が傾くころ、作業道具を片づけ、その日記録した化石を博物館に持ちかえる。

6 古生物学者育成の現場

ハンマー隊のメンバーは、恐竜博物館研究員のほかに、全国の大学生・大学院生たちで構成されている。発掘期間が夏休みに重なっていることから、毎年多くの学生が発掘調査に参加。大学で地学を専攻する学生が大半をしめていて、彼らにとってここは実践的な経験を積むことができる貴重な現場となっている。

また、恐竜博物館で働く研究員の半数近くも、かつて学生時代に発掘に参加した経験をもっているという。北谷町は、単なる調査現場ではなく、古生物学者の育成・交流の拠点にもなっているのだ。



古生物学者育成の現場

ハンマー隊のメンバーは、恐竜博物館研究員のほかに、全国の大学生・大学院生たちで構成されている。発掘期間が夏休みに重なっていることから、毎年多くの学生が発掘調査に参加。大学で地学を専攻する学生が大半をしめていて、彼らにとってここは実践的な経験を積むことができる貴重な現場となっている。

また、恐竜博物館で働く研究員の半数近くも、かつて学生時代に発掘に参加した経験をもっているという。北谷町は、単なる調査現場ではなく、古生物学者の育成・交流の拠点にもなっているのだ。